わすれられないおくりもの

笹塚小学校　四年一組　箕輪　天音

私は、この物語を読んで、さい初は、とても悲しいお話だと思いました。なぜなら、みんなに好かれていたアナグマが死んでしまうからです。アナグマが死んだことを知った、モグラ、カエル、キツネ、ウサギは、秋から冬に季節がかわっても、ずっと悲しんでいました。雪がふると、悲しみがさらにつもっていくと感じるほどでした。私も、もし身近な人が死んでしまったら、外に出たくもないし、何もする気にならないと思います。

でも、本を読み終わって、作者が「わすれられないおくりもの」という題をつけた理由を考えてから、気持ちが変わりました。アナグマが死んだことは悲しいことだけど、アナグマからみんなへのおくりものがちゃんと残っていたのです。それは一言で言うと、「みんなへの想い」だと、私は感じました。

アナグマは、もの知りで、だれに対しても思いやりの気持ちを持って接することができる、やさしい人がらでした。そんなアナグマから、みんなは、いろいろな事を教えてもらっていました。カエルは、スケートのやり方を教えてもらい、キツネはネクタイの結び方を教えてもらいました。ウサギは料理を教わり、今では、村一番の料理上手になりました。ア

ナグマがいなくなって一番ショックをうけたモグラは、はさみの使い方を教えてもらっていました。紙から型を切りぬく遊びでは、手をつないだ形が上手にできるほど、モグラはハサミの使い方がうまくなっていたのです。

このように、アナグマのみんなを愛する心が、みんなの行動として残ったのだとおもいました。そのことに気付いた時、私はこの物語はアナグマの「想い」がカエルやモグラなど、仲間に伝わった、心があたたかくなるお話だと思いました。他の動物たちの悲しみも、アナグマの残してくれたおくりもののおかげで、だんだん消えていきました。まるでアナグマがそばにいるようだと思いました。

私の心の中にも、「おくりもの」があります。それは、家族や友達からもらったやさしさです。たとえば、私が道で転んだ時、みんなが心配してくれます。「だいじょうぶ。」と声をかけてもらえると、それだけで気分がきりかえられるし、自分が大切にされている、とうれしくなります。よく考えてみると、私は生まれた時から、たくさんの人に「おくりもの」をもらっていたことに気付きました。たくさんの人から「おくりもの」をもらった分、これから、周りの人に「おくりもの」をわたしていきたいです。困っている人がいたら自分から声をかけ、アナグマのように助けてあげたいです。この物語を読めてよかったと思いました。